第 43 回日本受精着床学会総会・学術講演会

2025.8.28-29 名古屋

O-116

ホルモン補充周期と自然排卵周期による凍結融解胚盤胞移植の妊娠成績比較

藤本有美¹、佐藤学¹、森本義晴¹

医療法人三慧会¹ HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

凍結融解胚移植において、ホルモン補充周期（HRC）が自然排卵周期（NC）より主流である。しかし、HRC は NC と比較して癒着胎盤などの産科合併症リスクが高いと報告されている。当院では NC による凍結融解胚移植症例が増加傾向にあるものの、HRC と NC 間の妊娠率が同等であるかは十分に分かっていない。そこで子宮内膜準備法が妊娠成績に与える影響を胚盤胞移植症例において検討した。

【方法】

2024 年 1 月から 12 月までに当院で実施した凍結融解胚単一胚盤胞移植 971 周期を対象とした（HRC 群：365、NC 群：606）。妊娠の有無（心拍確認の有無）を従属変数とし、子宮内膜準備法（HRC/NC）、胚盤胞の胚齢（Day5/Day6）、子宮内膜厚、SEET 法実施の有無、移植胚の凍結周期（刺激周期/自然周期）、胚凍結時の妻年齢、胚盤胞の TE グレードを独立変数として多変量ロジスティック回帰分析を行った。

【結果】

子宮内膜準備法は NC 群で妊娠率が高い傾向を認めたが、統計学的有意差は認められなかった（オッズ比：1.30、95%信頼区間：0.98-1.72）。一方、TE グレードは妊娠率と有意な正の関連を示した（オッズ比：1.72、95%CI：1.39-2.12）。また、胚凍結時の妻年齢は妊娠率と有意な負の関連を示した。（オッズ比：0.91、95%CI：0.88-0.94）。

【結論】

本研究では、子宮内膜準備法（HRC と NC）間で妊娠成績に有意差を認めなかった。凍結融解胚盤胞移植において、患者の負担軽減、移植までの準備期間短縮、投薬による副作用と費用、産科合併症リスクを考慮すると、NC による子宮内膜準備法を選択することが臨床的に有用である可能性が示唆された。